

# 経営学部創設10周年に寄せて

中京大学学長 小 川 英 次

経営学部創設10周年を迎え、学長として一言お祝いを申し上げます。とくに経営学部出身の私と致しましては、経営学部にかかわる色々な出来事にも関係させていただきました。平成6年4月に中京大学経営学部に着任して以来すでに足掛け8年となっています。着任早々大学院経営学研究科の創設にかかわらせていただき、平成7年4月からの大学院発足に際しましては、初代研究科長に選んでいただきました。前後の事情の良くわからないときの就任でもあり、経営学部教授会メンバーの御厚意あるアドバイス、協力あってはじめて任務が達成できるものでありました。

3年間の研究科長の間は、社会人入学への働きかけ、そのための夜間授業の導入などによって経営学研究科はまずまずのスタートを致しました。その後は中垣現研究科長のすぐれた手腕により順調に大学院経営学研究科の活動は推移しています。しかし昨今のビジネススクールの議論と一部の大学による試行をみると、わが経営学部も学部、大学院においてさらなる積極的対応を迫られています。これからの学部、大学院を支えられる先生方の着想と実行力の発揮が待たれます。

「中京経営研究」の出版の中での思い出として、経営学部創設時から大きな役割を果たされたいまは亡き相馬志都夫先生のことを忘れることはできません。第9巻1号（1999年9月刊）には小生も「TQMと日本の管理方式」と題して寄稿させていただきました。そこでは先生のアメリカ管理論史のすぐれた業績を偲びつつ書かせていただきました。相馬先生は教学部長としてまた経営学部教授として、中京大学の発展と経営学部の創設そして発展に大きな力を発揮されました。

経営学部10年の歴史は私の関係させていただいた間でもカリキュラム変更から始まって、多くの改革、改善を次々と進める革新的なものでした。いま10年を経過し、21世紀の初頭に立って、これからあるべき経営学部、大学院経営学研究科の方向を考えてみますと、なすことのな多

きことを思わざるを得ません。IT対応、学生の皆さんの就学満足度を高めるカリキュラム対応、授業対応等々は急がねばなりません。研究成果発表の機会も教員、大学院生の間に一層拡げる必要があります。

時の流れの中の節々で、組織の現状を分析し、未来構想を明らかにし、これを実現すべく一步一步進む強い決断力とこれを実行する力が必要となっています。10年目の回顧と新たな展望は、組織活性化にとって不可欠で大切な事だと思います。

中京大学は21世紀を逞しく生きようと、来年（平成14年）4月からは10番目の学部となる国際英語学部の新設を計画しております。また9番目の大学院心理学研究科も新設されようとしています。さらには通信制教育を進める通信制大学院情報科学研究科も同時に設けられることとなっています。このような動向のなかで設置から10年を迎える経営学部が中京大学の中で変わらず革新的スタンスを取り続けられることを期待致しまして、お祝いの言葉と致したいと存じます。